

王様と海賊が登場のホルムズ海峡

爽やかな5月の風が心地よい季節となり、日本列島の何処も明るい話題で満ちる時期なのですが、今年は先が読めないイラン情勢から、すっきりしない時間が過ぎているようです。「王様然としたトランプ米大統領はイランの出方を読み誤り、戦闘は短期で終結し、米国が押せば弱体化したイランの体制は崩壊し、勇気ある米大統領として歴史に名を残すことができると考えていたに違いなく、現実には、世界的エネルギー危機に発展してしまった状況のよう...」との元外務事務次官



藪中三十二氏は読売新聞（直言）にて、「米国頼みの時代は去った 東アジアの安定、日本が主導すべきだ」の論考が注目されます。… トランプ外交は驚きの連続である。第2期政権の1年目は関税旋風が各国を襲ったが、2年目に入ると、圧倒的な軍事力を行使し始めた。ベネズエラへの電撃的な攻撃と大統領拘束で年が明け、2月に入りイランへの攻撃を開始した。… トランプ氏は米国の持つ軍事力と情報力に大いに自信を深めたようで、弱体化したイラン政権などは難なく倒せると思っていたようだった。… イラン降伏も時間の問題かと思われたが、そこからのイランの粘り、反撃は大方の予想を上回るものだった。… イランがホルムズ海峡をいねば人質に取り、ホルムズ海峡を通る原油・LNGタンカーの航行が不可能になった。… 米国は中東の石油に依存していないが、石油価格の世界的な高騰により米国内のガソリン価格が上昇し、国民の不満も高まった。… こうなると、なぜトランプ氏がイラン攻撃に踏み切ったのか、その目的は何で、いかなる出口を考えているのかが厳しく問われることとなった。… トランプ政権の恐ろしいところは、全てがトランプ氏の直感と気分で決まるところにある。… 王様と揶揄される言動である。



こんな時期に、百田尚樹の小説『海賊とよばれた男』を彷彿とさせるようなニュースが飛び込んできました。約2カ月間ペルシア湾に足止めされていた日本のタンカーが初めてホルムズ海峡を通過したのです。（日本の大手石油元売である出光興産所属の船舶で、200万バレルの原油を積載して名古屋に向かおうとしていたところ、2月の米国のイラン攻撃によりホルムズ海峡が封鎖され、足止めされていた状態だった。）駐日イラン大使館も、出光興産が1950年代にイランから石油を秘密裏に日本へ運んだ「日章丸事件」についてSMSに投稿し、「このレガシーは今日においても極めて大きな意義を持ち続けている」と掲示したようです。1951年にイラン政府が石油国有化を宣言し、これに反発した英国側が海軍力を動員して海上を封鎖する中、出光興産はタンカー「日章丸」を送り、英国の封鎖網を突破して石油を運搬することに成功。戦後復興のために安価に調達できるエネルギーを切望していた日本と、石油の販路を必要としていたイランの利害関係が一致した事件だった。ちなみに海賊と呼ばれたのは「日章丸事件」を主導した出光興産創業者の出光佐三でした。

「王様」と「海賊」の登場となった中東情勢の現状である。